


「もったいない」の心



「もったいない」と言われても、今のように物があふれている時代は、どうしようもないじゃないの？」
さて、皆さんはどのようにお考えですか？

料理を取りすぎた

日曜日の昼、橋本啓介さん（36歳）一家は、バイキング形式のレストランへ食事に行ってきました。お店の中は同じような親子連れで込み合っています。

妻の洋子さん（34歳）、一人娘の春香ちゃん（8歳）と一緒に、お皿に料理を載せて席に着き、さっそく食べ始めました。人気のレストランだけに味もなかなかのものです。啓介さんのお皿はあつという間に空になり、すぐにおかわりのために席を立ちました。

その姿を見て、春香ちゃんも啓介さんのあとに続きました。

「自分の食べられる分だけ取るのよ」

そんな洋子さんの注意にうなずいた春香ちゃんでしたが、戻ってきたときのお皿には料理が山盛りでした。

啓介さんは二度おかわりをし、お腹が苦しくなってきました。しかし、もつたいたないので残すわけにはいきません。少し無理をして何とか食べ終わりました。「こういうところだと、目移りしてどうしても取りすぎちゃうな」

と言う啓介さんに、「まったく食い意地がはっているんだから」

と、洋子さんはあきれ顔です。

春香ちゃんは、案あんの定じょう、料理を食べきれませんでした。その分、洋子さんが何とか努力しましたが、結局、少しだけ残してしまいました。

欲張よくばってしまうのは、啓介さんや春香

ちゃんだけではないようです。まわりの

テーブルを見回すと、料理を残したままで席を立つお客さんが少なくありません。壁には「お皿に取った料理は残さないでください」との注意書きが貼はられています。

「もったいない」が伝えられていない

その日の夜、春香ちゃんが寝たあと、啓介さんは、昼間のできごとを洋子さんと話しました。

「今日、レストランの料理を残してしまっただろう。何となく気になってさ」

「そうね。他にも取り過ぎて残していた

人が多かったわね。もったいないと思うけれど、仕方がないのかしら」

「決められたお金を払はらうんだから、食べきれなくてもかまわないという考えがあるのかもしれない。もったいないという意識が薄れているのかな。それだけ豊か



な時代なんだろうな」

「私が子どものころも、欲しい物はだい

たい手に入った時代だったけれど、おばあちゃんからは、貧しかった時代のことをよく聞かされたわ」

「うちの親父も、食事を残すことには厳しかったよ。『米という字を分解すると八十八になるのは、農家の人が八十八回手をかけなければ米が育たないからだ』と言って、ご飯粒一つでも残したら叱られたもんだよ」

「そうね。おじいちゃんがお弁当のふたについたご飯粒を、箸で一つずつつまんで食べるのをよく見たわ。それだけ食べ物を大切にしていたわけね」

「ぼくらは、そうしたことを、今まで春香にあまり話したことがなかったな。もったいないという気持ちを伝えるのは、僕たち親の責任かもしれないね」

豊かな時代の中で

「もったいない」

今日、この言葉は私たちの生活の中から消えつつあるようです。

「飽食の時代」と言われるようになってずいぶん経ちます。お腹が空いたら、スーパー・マーケットやコンビニエンス・ストアに行きさえすれば、食べ物が簡単に手に入る時代です。食

品も賞味期限が来たら、あっさり捨てられてしまいます。

日用品について見ると、安くて品質の良い製品がたくさん出回り、簡単に買い換えることがで



きるようになってきました。電化製品が故障した場合でも、修理代と新製品の値段がほとんど同じだったり、ともすると新製品のほうが安く手に入ることも珍しくありません。

携帯電話にいたっては、ほんの数か月前に発売された商品でもすぐに時代遅れになってしまい、次々と新製品に買い換えられています。

私たちは歴史上例を見ない物の豊かな社会で暮らしています。物があ

ふれていて、「捨てなければ生活できない」状態の中にいると、しだいに「もったいない」という感覚が失われていくのは、当然のなりゆきなかもしれません。



物を大切にする文化

しかし、経済的に豊かであつても、物を大切にする文化をきちんと受け継いでいる例は、イギリスなどで見ることができません。

たとえば、電化製品や自動車などでも、丈夫で耐用年数が長く、飽きのこないデザインの商品に根強い人氣があり、長く使い続けられています。住宅などで

も、建築して百年を超える家が普通に売買されています。

また、家具一つをとつても、自分の趣味に合うものが見つかるまで何年もかけて探し求め、本当に納得できるものを大切に使い続けることが多いようです。

購入した人が、物に自分の手を加えていくことで愛着が増し、古さや不便さよりも、物に対する思いを大切にしているのです。

物を大切にすることは、日本人にとつても、少し前まではごくあたりまえのことでした。しつかりとした造りの住宅や家具、生活用品などを大切に使い、補修を繰り返して、次の世代へと引き継いできました。

たとえば、裁縫道具やひな飾りなどは、豊かさの中でも、新しい物、便利な物ばかりを求めるのではなく、古い物でも世代を継いで大切に使われてきました。

そうしたことの意味に、いま一度目を向けてみてはどうでしょうか。

「もったいない」という心

「もったいない」は本来「勿体無い」と書きます。語源についてはいろいろな説がありますが、「物に体無し」が語源で、「物のありようや形態が本来の姿から、はずれている」という説が有力です。

『広辞苑』（岩波書店）では、「物の本体を失する意」とされ、

① 神仏・貴人などに対して不都合である。不届きである。

② 過分のことで畏れ多い。かたじけない。ありがたい。

③ そのものの値打ちが生かさねず、無駄になるのが惜しい。

の三つの意味が示されています。つまり、物の持ち味や存在の意義を十分に生かすことができなくて申しわけない、という意味だと考えられます。





「せっかくおいしく食べられるのに」「まだ使うことができるのに」捨てられてしまうことを残念に思う気持ち、物の「いのち」をまつとうさせることができないことを悔やむ気持ちです。

日本人は、物を単なる物ではなく、「いのち」をもつた存在として見てきました。針供養や筆供養のように、役目を果たした道具を供養するという習慣も残っています。古くなった物、使われなくなった物をただ捨てるのではなく、感謝の気持ちで供養することを通じて、物を大切にする心が受け継がれてきました。物のいのちに感謝し、物の本来の持ち味を最後まで十分に生かすように努めることが、「もつたいない」の心といえるでしょう。

※針供養・筆供養：人のために身をすり減らし働いて折れた針や、使えなくなった筆やペンを集めて供養すること。針は、豆腐やこんにやくに刺して、筆やペンは浄火にくべて供養する。

自然に対する感謝

私たちが使っているものは、元をたどれば、すべて自然から与えられたものです。「もったいない」という心は、自然の恵みに感謝して、与えられた物のいのちを大切に使用させていただくという謙虚な気持ちにつながっています。

法隆寺に代々仕える宮大工の家系に生まれ、平成七年に亡くなった西岡常一さんは、法隆寺の解体修理や薬師寺伽藍の再建などを手がけた名棟梁でした。西岡さんは、宮大工の仕事を通じて、木のいのちを生かすことを考えてきました。

西岡さんは、木には二つのいのちがあ

ると言っています。一つは木のいのちとしての樹齢、もう一つは木が用材として生かされてからの耐用年数のことだそうです。そして、樹齢と同じだけの耐用年数を木に持たせることが、自然に対する人間の義務であり、そのために大工がそれぞれの用材の癖を熟知して、それに



※伽藍：僧侶たちが住んで修行する所。



合った使用方法を選ぶことが必要だと述べています。

「木は大自然が生み育てた命ですな。木は物やありません。生きものです。人間

もまた生きものですな。木も人も自然の分身ですがな。この物いわぬ木とよう話し合つて、命ある建物に変えてやるのが大工の仕事ですわ。木の命と人間の命の合作が本当の建築でつせ」

(西岡常一著『木のいのち木のこころ(天)』草思社刊)

この言葉からは、木と真正面から向き合ってきた職人ならではの重みと自然に対する謙虚さ、さらにそのいのちを生かしていく自分の仕事に対する責任感と誇りを感じるができます。

私たちは物を通じて自然の恩恵を受けています。自然の恵みに対して感謝し、物に与えられたいのちを大切に使うということが、私たちの責任ではないでしょうか。

作った人の 思いを大切に する

自然から与えられた素材は、物を作る人たちの手を経て新しいのちが吹き込まれます。

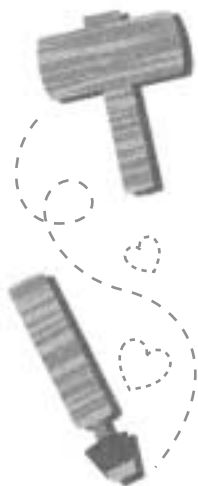
西岡さんは、法隆寺の解体修理に携わる中で、飛鳥時代の工人（職人）の技術の高さを目の当たりにして、深く感銘を受けています。千三百年の風雪に耐え、今もなお創建当時の姿をとどめているのは、高い技術があつてこそそのものです。

私たちの身の回りの物でも、時間と手間をかけて作られたものであればあるほど、その品物は丈夫で精巧なものとなります。そこには職人たちの深い思いが込

められています。こうした品物は大切に使い込むほどに味が出て、使い継いでいく人の思いが刻まれていきます。

物を大切に使うということは、「それを作った人や使い続けてきた人たちの思いを大切にする」ということにつながります。逆に物を粗末に扱うことは、そうした人々の心を軽く扱うということになるでしょう。

このように、「もったいない」という心は、自然と共に生き、自然によつて生かされてきた私たちの先人の歴史や文化と深くつながっているのです。



「もったいない」 の復権

では、「もったいない」の心を現代社会に復権ふっけんさせるためには、どのような考え方が大切なのでしょう。

かつての貧しい時代は、物が乏とほしくて、生活必需品ひつじゆを、できるだけ使いきることが求められました。

たとえば、お下がりという形で、衣服やおもちゃが何人もの子どもたちの間で回っていた時代は、物の乏とほしさと、物の「いのち」を生かす精神とが、うまく合っていたといえるのではないでしょう
うか。

しかし、「使い捨て」の感覚が身に付いてしまった現代は、「もったいない」の言

葉だけを繰り返し返しても、「もったいない」の感覚を持つことは、なかなか難しいこと
とでしよう。

そこで、考えなければならぬことは、地球環境の問題です。

地球規模の環境危機が世界で叫ばれていますが、その大きな原因の一つに、新しい物を作る一方で、どんどんゴミを出し続ける私たちのライフスタイル（生活様式）が挙げられています。単に「新しい物がよい」「便利な物がよい」という理由でゴミを増やし続けたら、地球は廃棄物ぶつでいっぱいになってしまいます。

社会にも、こうしたあり方を反省する動きはすでに出ています。

企業では、製品をただ販売するだけでなく、使い終わったあとにどのように

サイクルするかまで考えて物を作るようになっていきます。ビール・清涼飲料の業界では、工場廃棄物の完全リサイクルが進んでいるといえます。

私たち一人ひとりも、意識の改革に迫られているといえるでしょう。

新たに品物を購入する場合、本来に生活に必要なのか、長く使えるかなどをよく吟味して、無駄なものを増やさないようにすることが大切でしょう。物を使うときには丁寧^{ていねい}に扱い、こまめに手入れを行って、製品の寿命^{じゅみやう}を延ばすよう心がけたいものです。

自分の家で使わなくなった品物でも、他の人にとっては役に立つ物も少なくありません。リサイクル・シヨップやフリー・マーケットといった形で、物のい

のちを引き継いでいくことができます。家具や衣類などをリフォーム（再生）すれば、古くなった物にも新しいのちを吹き込むことができるでしょう。

そして、どうしても捨てなければならぬ場合でも、物のいのちに対する感謝の気持ちと、すべての物を生かすという気持ちを持つことが大切でしょう。そうすれば、リサイクルのために分別^{ぶんべつ}する意味もより明確になり、環境に対する意識も高まることでしょう。

「もったいない」の心は、このように日常の生活の中で、私たち一人ひとりが意識しながら実践することによって、豊かな現代においても蘇^{よみがえ}っていくのではないのでしょうか。

「大切にしようね」

ある日、洋子さんが押し入れを整理しているとき、奥から熊のぬいぐるみが出てきました。春香ちゃんのお気に入りです、幼稚園のころまでは毎日のように遊んでいましたが、いつしか押し入れの奥にしまいつばなしになっていました。少し古くなつてはいますが、作りはしっかりしています。

「春香、このぬいぐるみはどうするの？
もう捨てようか」

「えー、捨てちゃうの、かわいそう」

「でも、押し入れの中に入れておいても
かわいそうだよ」

「うん……」

お気に入りだっただけに、春香ちゃんは捨てたくないと感じています。

「それじゃあ、千夏ちゃんにあげたらどうかしら」

千夏ちゃんは、四歳下のいとこです。

「うん。千夏ちゃんならいいかな」

春香ちゃんもそれで納得しました。

次の日曜日、千夏ちゃんがお母さんと一緒に遊びにきました。春香ちゃんは、ぬいぐるみのことを千夏ちゃんに話しました。千夏ちゃんは喜んでもらってくれました。

春香ちゃんはぬいぐるみを渡しながら、ちよつとおねえさんらしい口調で話しかけました。

「私がかわいがついていた熊さんだから



ね。千夏ちゃんも大切にしていね」
ぎゅつとぬいぐるみを抱きしめている
千夏ちゃん的笑顔を見ると、春香ちゃん

は、ちよっぴり寂さびしく感じながらも、
ホッとしたような、何だかうれしい気持
ちになるのです。